



## 故・福田靖子追悼演奏会

～ピティナと共に歩んだ35年間の映像とともに

3月29日（金）東京芸術劇場大ホール

2002年3月29日（金）、池袋の東京芸術劇場・大ホールにおいて『福田靖子 追悼演奏会』（社団法人全日本ピアノ指導者協会主催）が開催された。社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）の創立者である福田靖子が逝去したのは、2001年11月10日のことであった。故人は1966年に前身である東京音楽研究所を創設し、以来35年間、研修会やコンクールの開催、また生涯学習の振興などに力を注ぎ、ピアノ教育のレベル向上のために、その生涯を費やした。演奏会はピティナワールドフェスティバルの一環として開催され、全国各地、そして海外から、故人と縁のある方が多く集まった。

## ●第一部 「ピアノ」と「追悼の辞」

第1部は、追悼の辞を間に挟みながら、ピアノが演奏されるという構成。本多昌子さん・真子さん親子の連弾で、演奏会は静かに幕を開けた。お二人はピティナ・ピアノコンペティションで金賞を受賞しており、特にお母様の昌子さんは記念すべき第1回目の受賞者である。曲目はフォーレ作曲〈ドリー 作品56〉より、「ミーアアウー」と「ドリーの庭」。お母様の昌子さんは「フォーレが、我が子のように可愛がっていたドリーのために書いた曲を、母親のように愛情を注い

で下さった福田靖子先生に聴いていただきたい」と話している。

国際モーツァルトコンクールの入賞者である近藤麻里さんは、モーツァルトの《ロンド イ短調 K.511》を演奏した。これは当時コンクールでも弾いた曲で、福田靖子との思い出が詰まっているという。客席では、皆が故人の国際的な活動の功績を思いつつ、モーツァルトの哀愁漂う調べに耳を傾けたことであろう。



### 羽田 孜 (当協会会長・衆議院議員)

「ピティナの今日の隆盛は、先生の高い理想・情熱・行動力、説得力があつたこと。先生の意志を受け継いで前に向かって進む事が、先生にお応えする道と信じている」

### 中山 靖子

(当協会副会長・東京藝術大学名誉教授)

「創設当時に講座を担当したが、その時受講した教師たちは現在も活躍しており、先生が望んだ成果が出てきていると感じている。先生には今後も私達を見守ってほしい。」



### 二宮 裕子 (当協会理事)

「先生は私たちピアノ教師に、非常に大きな影響をしっかりと与え、そして残してくれた。私たちは、深い感謝の念とともに、尚一層、先生の努力に報いるようにしていかなばと、心を新たにしている。」



上) 本多昌子・真子さん親子  
下) 近藤麻里さん



播本 三恵子(当協会理事)

「ピティナ・ワールドフェスティバルを二年前から企画していたが、こうして迎えてみると、福田先生の追悼のために準備していたのではないかという気がする。やり残したこともきつとあったに違いないが、この地上でなすべきことは果たされたのではないのでしょうか。」



金子 勝子(当協会監事)

「先生は亡くなられる寸前までピティナのため、日本のピアノを習う子供たちのため、そしてピアノ指導者のために命を費やされた。その成果は見事に開花している。今後、残された者でピティナを守り、世界に躍進するために力を尽くしたい。」

そして、ピティナ・ピアノコンペティション最多金賞受賞者の泉ゆりのさんが、シューベルト作曲、リスト編曲の〈セレナーデ〉を演奏した。元々はシューベルトの歌曲「白鳥の歌」に取められているこの作品は、まさに故人を偲ぶにふさわしい選曲であっただろう。客席からは、「心に響く演奏で、感動の中に浸ることが出来た」という声も寄せられた。

ピアノ演奏の間に、故人と縁のある7名が、思い出を振り返りながら追悼の意を表した。



ポール・ポライ  
(ジーナ・バックアウワー国際コンクール主宰)

「彼女は仕事上の付き合いを越えて、真の友であり同志であった。彼女は質の良い教育のために力を尽くし、人間性に対する偉大な功績を、彼女ほどに残した人を私は知らない。彼女と出会えたことを幸福に思う。」



上) 泉ゆりのさん



寺脇 研(文部科学省大臣官房審議官)

「人生いかにあるべきか、役人いかにあるべきか、ということを教えていただいた。音楽教育者のみならず、人間の教育者として大きなものを残されたと感じている」

## ●第二部 「合奏」と「映像」



演奏に先立って、福田靖子と日本モーツァルトコンクールを通じて交流のあった当協会理事の海老澤敏が解説をした。

海老澤 敏(当協会理事・日本モーツァルト音楽コンクール会長)

「モーツァルトが未完で終わらざるを得なかったこの作品を弟子ジュスマイヤーが完成したことを思うと、残された私たちがその先生のご遺志を受け継いで、成就しなければならぬだろう。その課題の重みを思い計りつつ、私たちはモーツァルトの〈レクイエム〉を聴き、先生を偲びたいと思う。福田靖子先生の霊よ、安らかに眠れ！」

福田靖子の遺志によりモーツァルトの《レクイエム》が演奏された。指揮は吉田裕史、オーケストラは東京交響楽団のメンバー。《レクイエム》で吉田が使った指揮棒は、故人が生前に吉田から譲り受けたもので、福田靖子は指揮をするのを楽しみにしていたという。そしてソリストには、森麻季(S)、手嶋真佐子(A)、吉田浩之(T)、稲垣俊也(B)といった、国内トップクラスの若手声楽家による、均整の取れたアンサンブルを聴かせた。合唱はこの追悼演奏会のために公募で集められた特別合唱団で、学生も含め約250名が参加し、吉田氏の指揮の下で迫力のある演奏を展開した。演奏中、舞台上のスクリーンには、生前の福田靖子の映像が映し出される。この映像を背景に、モーツァルトのレクイエムの合唱がホールに響き渡り、聴衆の感涙を誘った。



それぞれの感動と感謝の心が、今後のピアノ業界の発展に繋がっていくのを信じる瞬間であった。故人と関係の深い人々が一堂に集い、その功績を振り返る中で、これからの音楽教育の展望を考えるきっかけを得たのではないだろうか。

最後に、主催者である協会専務理事の福田成康から挨拶が述べられた。

「36年前にたった一人で発足したこのピティナも、今では、会員数が8,000名に達し組織の方で運営されるようになりました。ピティナの創立者である母は、亡くなりましたが、何事にも一生懸命やるというその精神は脈々と続いております。そして、ピティナは、皆様と共にさらに進化してまいります。」大きな拍手に包まれたのが、時代と共に受け継がれていくピティナの伝統に、敬意を持った一歩が、ここに前かがい幕を閉じた。



- 指揮：吉田裕史
- ソリスト：
- 森麻季 (ソプラノ)
- 手嶋真佐子 (アルト)
- 吉田浩之 (テノール)
- 稲垣俊也 (バリトン)

- 東京交響楽団メンバー：
- 大谷麻子 (コンサートマスター) 他
- 追悼演奏会特別合唱団
- (合唱指揮：桑原英明)



福田成康 (当協会専務理事)